

OB総会にて

「よっ、おつかれさん！ごくろうさま」
にこにこ笑いながら、杉崎会長がまず最初にいらした。



総会に出席したことの無いOBは「OB総会」という名前から、さぞ水をうったような緊迫した重厚な会議を連想するだろう。（OB会は株主総会ではない）

しかし、実際には10名ほどのOB役員が、雑談している様子を浮かべてほしい。これも春高陸上部独特の持ち味だ。「全員がファミリー」という自覚があるので、会計を疑うこともないし、後輩である監督が采配しているのだから苦言を呈することも無い。会議の進行は、あくまで略式のようなものだ。

荒木同窓会長から

「いやあ、野本くん。あのコラム良かったよ！
記録を載せるだけでは伝わらない臨場感があるね。
去年を思い出すよ。
しかし、野本くんは本職と全然関係ない事をよくあそこまで細かく書けるね。すごいね。」

私は「とんでもありません。大阪ではご馳走様でした。
少しでも多くのOBに奇跡の瞬間を伝えたくて……



荒木先輩らと 大阪にて 2006年

……と、身に余るほめ言葉をいただいた半面、
「本職」（歯科医業）も真面目にやってる？という荒木先輩の「にやりとした言葉」に、見抜かれていたようでドキッ（汗）とした。
私は昔から、先生とか先輩たちから注意ばかりされてきたのだ（泣）。

本会議で秋本副会長が言った。

「いやあ……みなさん、うちの（春高陸上部の）ホームページ見ました？
あれすごいですよ。過去の試合戦跡が全て載っていて、
歴代から現在までの選手の活躍が、全部わかるんです。
大塚くん、あれお金足りてるの？足りなかったら
49回に出してあげてくださいね。
ありゃあ管理するのにボランティアじゃあ大変だよ。」

そういつて、倉田や吉田の労をねぎらってくれた
秋本先輩は高校11回のOBである。

いうまでもないが、インターハイチャンピオンだ。

今回はいつもの怪物列伝というより、

村井先生(高27回)、高野先生(高29回)、石塚先生(高34回)ら



秋本先輩を通して春高陸上部の部風として見ようと思う。

記録集から高校11回当事の記録をひろって見たが、あやうく関東大会の記載を見落としそうになった。なぜならあまりにも入賞選手数が多く、現在の東部大会かと思わせるほどであったからだ。

のべ20名ほどのインターハイ出場を果たしている。

ほとんどの種目で入賞していることになり、まさに「赤シャツ」だらけの決勝であったろう。

第11回関東高校対抗選手権大会

100	11.3	大木 茂男
200	23.0	大木 茂男
400	53.4	針ヶ谷哲夫
110H	16.4	山野井長治
110H	16.4	大木 茂男
200H	27.4	山野井長治
4 × 2 0 0		1.35.9 兼子、針ヶ谷 助川、大木
走幅跳	6.68	石井 弘道
三段跳	14.33	石井 弘道
砲丸投	13.52	秋本 久次
円盤投	44.94	秋本 久次
円盤投	38.43	金子 信夫
やり投	53.91	佐藤 政宏
やり投	46.98	中村 孝夫
保投	49.90	折原 悦夫
保投	46.83	関根 侑



応援に応える 高島

第11回全国高校対抗選手権大会

100m	11.2	大木 茂男
三段跳	14.82	石井 弘道
円盤投	47.29	秋本 久次

高校チャンプの重圧

円盤投げ大会新記録でインターハイ制覇をしてしまったのだから、周囲の期待は過剰なものであったろう。

思うように記録が伸びなかった時代の苦しさもあったという。

2キロの円盤が飛んでいってくれない・・・我々には味わうことの無い「高校チャンピオン」



初代顧問 関根監督の激励

にしかわからないプレッシャー。

隣席する西村先輩（10回）が「きゅうちゃん（秋本さん）は身体が細いからね・・・とても円盤の選手には見えなかったよ」

実際、秋本先輩は背丈こそ180CMではあるが、脚がとても長く跳躍選手のごとき体型をしておられる。

田中芳輝先輩（13回）も「そうですよ。円盤のごっつい選手に混じって秋本先輩の細さ、脚の長さが不思議に写りましたよ。まるで400mランナーだ」という。

実際に俊足であったようで、リレーメンバーとして名を連ねたこともあったという。

後藤 均先輩然り、竹村さんも高野さんもリレーメンバーであった。

後藤先輩に至っては、200mの関東チャンピオンである。

強い投擲選手は体重でなく筋力で投げるので、もちろん脚も速い人が多い。

秋本先輩 西村先輩



「後輩にやさしい」春高陸上部

二次会で秋本先輩に隣席させていただいた。

私が勝手に思い込んでいるのだが、

「インターハイ大会新記録優勝、三郷陸上クラブを育ててきた人、そこから多くの全国クラス選手が巣立っていった・・・」そう思うと緊張してしまう。

ただ春高陸上部の通例通り、名もなき一後輩である私に、秋本先輩も優しくかった。

どうやら私の名前も知っていてくださるようだ。

「おお、野本くん！よく来たね。まあまあ（ビールをつぎながら・・・）。いやしかしあのホームページはすごいなあ！あれ誰がやってくれてんの？・・・そう、倉田くんっていうの！？ごくろうだねえ・・・お金かかるんじゃない？・・・」

しきりとホームページのことを気にかけて下さっていた。

たしかに倉田たちの労力も大変だったろうが、秋本先輩はそれ以上に後輩である我々に気を配って下さるがゆえのコメントだなあ・・・と強く感じた。私には歯科の話をたくさんしてくれたり。

もし私が60～70歳になって30歳代の後輩たちと飲み会で座したら、何を話題にしようか苦慮してしまうであろう。そんな席でも年配のOBは若手に気配りをし、少しでも緊張せず、楽しんでもらえるよう配慮して下さる。

二次会にて 後藤前会長ら

小原先生も決して部員を怒鳴ったりしなかった。

（私は「野本、もっとちゃんとしろ」とよく言われたが・・・）

竹村さんも、高野さん大塚さんもそうだった。

叱って淘汰する方法では、いまの春高陸上部はまったく別のものになっていたであろう。

私もきびしく威圧されていたら



卒業後も戻ってはこなかったろうし
後輩たちのタイプからして、みなそうだと思う。
春高陸上部員にのみ見られる稀例だ。

後藤 均先輩も杉崎 孝先輩も決して
我々のような小僧を叱ったりはしなかった。
後藤先輩達の世代から見れば、我々なんぞ
極めて甘ったれで無礼者であったろうに……

「強いことが全てじゃない」

春高陸上部は
インターハイ累積得点百数十点、関東制覇8回。

「おお！君が清水くんか！！」岩槻を愛する岡野先輩
(高10回) 写真左 清水(高37回)



私は敬意の意味で昭和30年代の黄金期のことを、当事者である先輩達にさせてもらうのだが、
「のもとくん、そんな昔の強い弱いの話ばかりしちゃダメよ！がははは！」と、たしなめる先
輩もいる。

先輩達が自ら作った伝説だからかまわないと思うのだが、自画自賛は決して好まない方が多い
のだ。

大阪インターハイでご馳走になったとき、後藤先輩は言った。

「スターを選抜して育てる高校ではない。全員で県大会に進もうというチームなんだ、春高は。」

そうして脈々継続されてきた部風が、創部90年という驚異的なつながりを生んでいるのだと
思う。



未来へ

大塚監督の紹介で、62回新生があいさつをした。

20年後は間違いなく彼らがOB会を運営していく事になる。

これから二年半、競技を研鑽し、春高陸上部を楽しんでほしい。

高 37回 のもと歯科